

『地獄の一季節』——「序」註解の試み

渋 沢 孝 輔

ランボオの『地獄の一季節』は全九章から成っているが、その冒頭の章は全体の序の役割を果しつつ、ランボオの詩的来歴の要約のごときものになっている。以下、逐語風とその註解を試みてみたいが、原文は省略して、まずテキストを日本語訳によって示せば次の通りである。

かつては、もしおれの記憶が確かなら、おれの生活は、すべての人の心が開き、あらゆる葡萄酒が流れた饗宴だった。

ある夜、おれは「美」を膝のうえに坐らせた。——ところが苦々しい奴だと思つた。——そこで毒づいて

やつた。

おれは正義に対して武装した。

おれは逃げだした。おお魔女たちよ、おお悲惨よ、憎しみよ、おまえたちにこそおれの宝は預けられたのだ！

おれはとうとうおれの精神のなかから、あらゆる人間的な希望を消してしまった。あらゆる喜びの息の根をとめてやるために、そのうえに猛獣のように音も立てずに跳びかかった。

おれは死刑執行人どもを呼んだ。絶命しながら、奴等の銃の床尾に咬みついてやるためだ。穀竿からまきの刑罰も呼んだ。砂にまみれ、血にまみれて窒息するためだ。不幸がおれの神だった。おれは泥のなかにながながと

寝そべった。罪の風にわれとわが身を干からびさせた。しかもおれは狂気にまでさんざん悪戯をしてやったのだ。

やがて、春が白痴のむごたらしい笑いをおれに運んできた。

ところで、ついこのあいだのことだ、まさに危うく最期の音をあげそうになったおれは、むかしの饗宴の鍵をもう一度探してみようと思ひ立った。多分そこから食欲を取り戻すこともあるかと。

慈愛がその鍵だ。——こんな考えが閃いたのは、おれが夢を見ていた証拠だ！

「おまえはやっぱりハイエナかなんかであるさ：、「おれにあんなに愛らしい罌粟の花の冠をかぶせてくれたこともある悪魔がわめく。「死でもくらくらむがいい、おまえのすべての食欲、おまえのエゴイズム、七つの大罪のすべてをあげて。」

ああ！ そんなものなら摂りすぎた。——だが、親愛なるサタンよ、お願いだ、あんまり苛々した眼付はしないでくれ！ そして遅ればせのなにやら卑怯未練な代物を待つ間に、どうせ作家には描写や教訓の才な

どないほうがお好きなあなただ、そのあなたに、おれの地獄墮ちの手帖から、これらの目も当てられない数葉をちぎり取ってさしあげる。

一、***——この章には題名が附されていない。

「著者はこんなふう考えたに違いない。『序文』とするか……『はしがき』とするか……どうも野暮だ。いっそも附けないで置け。』(ドラエー)というわけでもあろうか。いずれにせよ、内容から推して、これが『地獄の一季節』全体の序の役割を果していることは間違いない。執筆時期は、ヴェルレーヌに拳銃で撃たれたあのブリュッセル事件後であるとするとすべての研究者の意見が一致している(『地獄の一季節』の創作年月は著者自身が末尾に附している日附によれば、一八七三年四月——八月であるが、各章がそれぞれいつ書かれたかについては諸説あり、それが作品の解釈に微妙に関係してこざるをえないが、ここでは詳しくは触れない)。「この序は一八七三年七月末に書かれた」(イニッド・スターキー)、「最後に書かれた」(ドラエー)、と互いに異なりながらも断定的に述べている例もあるが、確かなことは判らな

い。ただ、「本が仕上がっていることを前提としているように思われる」(ボヌフォワ)文の調子から見て、「七月末」、すなわち事件のあったブリュッセルからロッシュに戻って直ちに書いたものとは考えられず、むしろ「最後に」、ということは八月になってから書いたという意見の方がまだしも受け入れ易いであろう。事件後の作とする最大の論拠は、また、文中の「ところで、ついこのあいだのことだ、まさに危うく最期の音をあげそうになったおれは」という箇所が、拳銃で撃たれて生命の危険にさらされた時のことを暗示していると考えられる点である。もっとも、M・A・リュフのように、この「序」を含めて『地獄の一季節』全体が、少なくともその大筋は事件前に書かれていた可能性があり、右の箇所が事件を暗示しているとしても、最後の仕上げの段階で付け加えたものであろうと推論する論者もあるが、これらは別に詳しく考究すべき問題なので、今は省く。

「この冒頭の文章でランボーは、彼の精神的・文学的過去の主要な段階を叙べ、それから最近の内面の危機と、彼の『偽の改宗』のことを仄めかす。」(シュザンヌ・ベルナル)。「『地獄の一季節』のこの序は……燃えるよ

うな簡潔さでランボーの過去を喚起している。最後の『朝』や『訣別』の章が新しい叡智を予告しているのに対して、ここでは如何なる希望の光もこの地獄墜ちの男に現れてはいない。しかしながら、最後の段落の『遅ればせのなにやら卑怯未練な代物を待つ間に』という句は、彼がなおこの後何等かの作品を出版することを諦めてはいないことを窺わせる点に注意しよう。」(ミシエル・デコーダン)。その作品とは『イリュミナシオン』のことであるが、この解釈はブイヤヌ・ド・ラコストやダニエル・ド・フライフによって最初に暗示された。

二、饗宴だった——「気楽さと希望に満ちていた幼年時代の喚起。……ランボーはまた、彼が宗教的な悩みを持たなかった時期のことをも語っているように思われる。『饗宴』の語は、以下にふたたび現れ、明確にされる。」(シュザンヌ・ベルナル)。ジャック・ジャングーはこれをさらに人類全体の歴史にまで普遍化して、「それは古代の調和ある幸福で自然な生活であった。」(J. Gengoux: *La pensée poétique de Rimbaud*, p. 604)と述べているが、ジャングーの意見は、ジュール・ミシユ

レをはじめ、オキュルティスムの思想家エリファス・レヴィやヘーゲルを下敷にしながら、ランボーの全作品、とりわけ『地獄の季節』を人類のオキュルティスム的な発展段階になぞらえて解釈したもので、この句の解釈もそのようなドグマから導き出されたものである。むしろ、詩的には人類の歴史を夢想する余地もないわけではないが、少なくとも、第一義的にはベルナルの解釈で充分であろう。ドラエーは、『かつてはおれの生活は饗宴であった……。』あとは断わるまでもない。』(E. Delahaye: Les "Illuminations" et "une saison en enfer" de Rimbaud, p. 180)と逃げている。カトリシズムの立場に立つドラエーが、特に註釈の必要を感じて説明を加えているのは、「おれはとうとうおれの精神のなから、あらゆる人間的な希望を消してしまった」以下の部分である。十二・三歳頃のランボーは敬神の心の篤い従順なキリスト教徒で、上級生が教会の入口で聖水盤の水を撒き散らしてふざけているのを見て、猛然と飛びかかっていったという逸話が伝えられているほどであるが、ここで想起されている時期は具体的には果して何時頃を指すものか。一方で「七歳の詩人たち」には、母

親の眼を誤魔化して従順を装っていた胸底の偽善、聖書を読まされる日曜日への惧れ等が歌われていて、事実またその通りであったろうから、ここに言われている「すべての人の心が開き」、従って魂の自由な交流があった幸福な時期というのを、事実のうえで厳密に指定することは出来ないし、また無意味でもある。むしろ、既に旧来の「美」を「苦々しい」と思い、宗教的な苦悶に苛まれてしまっている自覚的な現在から、そうならない以前の理想状態を非現実的に回想したものとするのが真実に近いであろう。

なお、これも類似的の回想として、「朝」の次の箇所参照。「一度はこのおれにも、愛すべき、英雄的な、架空とも思えるような、黄金の紙に書きとむべき——あまりにも幸福な——青春が無かったか。」

三、毒づいてやった——「この句は、ランボーのドラマの開始を告げるものである。」(ウォーレイス・フォーリー)。独自の美意識に眼覚めることによって、旧来の「美」を苦々しいと思うに到ったのである。それはランボーのドラマの開始を意味すると同時に、「饗宴」の終

りをも意味する。「美」はここで、既成のあらゆる価値体系を集約したものと解してよいであろうが、特殊な解釈として、ここにランボーの性倒錯の徴候を見る者もあって、例えばロベール・ゴファンは、「突然、彼の性本能における一つの変化が、彼を他人から別け隔てる。美は彼にはもはや〔他人にとってのそれと〕同じものではない。——彼はそれに向って毒づき、罵る。」(R. Goffin: Rimbaud et Verlaine vivants, p. 236)と書くところ。ゴファンはこれをランボーの「女嫌い」の性癖への暗示と取っているのであるが、ここはやはり、「美学的解釈の方がより正当」(フォーリー)であろう。すなわち、「ランボーは彼の時代の高踏派的理想によって顕称されていたタイプの美への反逆に転じたのである。」(W. Fowlie: Rimbaud, p. 88) シュザンヌ・ベルナルは次のように言う。「高踏派が追求したプラスチックな美に対する反逆と同時に、古典芸術全般に対する反逆が問題になっているようである。『見者の手紙』には、事実、数々の『毒づき』が溢れている。『無数の愚かしい世々……年老いた馬鹿者たち』等々。」この解釈が最も一般的である。

習作時代のランボーは、ロマン派や高踏派(ユゴー、ミュッセ、グラティニー、ゴージェ、パンヴィル、ルコント・ド・リール、コペー、メラ等々——さらに遡ってウエルギリウス、ヴィヨン、シェニエ等の影響は言わないとしても)の影響を全身に浴びて詩作していたが、ほぼ一八七一年五月頃を境に、一転してこれらの同時代の手本のみならず、「ギリシャからロマン派の運動まで」、「エンニウスからテロルデウスまで、テロルデウスからカジミル・ドラヴィニユまで」を一束にして嫌悪し攻撃するに到った。いわば彼の時代までのヨーロッパ詩の二千年の歴史を向うに回して、そのすべてを一挙に批判し、斥そうとしているのであるが、その間の経緯と結果、ランボーの新しい理念の内容は、一八七一年五月十三日附イザンパール宛、同月十五日附ポール・ドメニー宛のいわゆる「見者の手紙」、また、同年七月十四日の日附を持つ韻文詩「花について詩人に語りしこと」等によって知ることができる。ランボーのこの急激な変化には、恐らく、普仏戦争による学校の閉鎖や故郷の町々の破壊、それに次ぐコミューヌの乱の革命的情熱の昂揚等が少なからぬ影響を及ぼしているであろうと考えられる。「美」

への反逆が、次の句にも見られるように、単に純粋な美学的問題だけにとどまらぬ所以である。

四、おれは正義に対して武装した——「すなわち、現社会の偽似正義に対して。」(シュザンヌ・ベルナル)。必ずしも正義一般ではないという点に注意する必要がある。ベルナルは韻文詩「おれの心よ、血と燠の」(「滅びてしまえ！ 権力も、正義も、歴史もあるものか！」)を参考に挙げているが、彼女はこの作品を、コミュニヌの乱に際してのランボーの無政府主義的激情の表現と見ているから、ここで言われていることも、事実のうえでは一八七一年五月前後の時点に相当する事柄と考えているのであろう。恐らくそう考えて差支えないと思われるが、ただ、「おれの心よ、血と燠の」の正確な創作年月は解っていないし、一八七二年の作としている研究者もあるから、この作品だけを手掛りにすることはできない。むしろ、一八七一年七月の日附のある「正義の人」などには、文字通り「正義」に対する呪詛攻撃が満ち満ちている。

威厳でござい、美德でござい、愛でござい盲目でござい、
正義の人だと！ 牝犬よりもばかばかしくて胸くそわるいわ！
……………

ソクラテスの徒にイエスさま、聖者に正義派、反吐が出る！
……………

おお正義派よ、おまえらのかわからけ腹に、おれたちは糞でもひっかけてやる！

こうした忌むべき「正義派」に対して、「正義の人」におけるランボー自身の立場は「苦しむ者にして反逆者」、「呪われた人間」であり、このことは「見者の手紙」においても強調されているところである。すなわち、詩人は「あらゆる偉大な病者、偉大な罪人、偉大な呪われ人の仲間入りをし、——そして至高の『賢者』となるのです！ ——なぜなら彼は未知のものに到達するからです！」「正義」とは、もう一度言えば、現社会を基礎づけている因襲的価値の一切を指すが、具体的には、当

時のランボーにとってそれは主としてキリスト教道徳であり、また、パリ・コミューヌによって否定されようとした政治社会体制を指すものであろう。それが必ずしも正義一般を指すものでないことは、「見者の手紙」でランボーは、詩に社会的な進歩や解放のモメントとしての特質をも見て、例えば、詩人は「人類や、動物、たちにもでも責を負っている」と書いていることでも知られるところである。もっとも、一時的には、「おれの心よ、血と煥の」に見られるように、地上のあらゆる秩序に対する無差別的な反逆の激情に身を委せたこともあるランボーであることも言っておかねばならない。

なお『地獄の季節』本文には、「むしろ、正義から身を守ることだ。」「悪血」「しかしながら正義のヴィジョンはただ神だけの喜びだ。」「訣別」等の言葉がある。

五、おれは逃げだした——やはり既存の秩序から。「因襲的世界から自分自身の内的世界（おお魔女たちよ、おお悲惨よ、憎しみよ）」への詩人の逃亡は、逃亡というよりも一種の探求となる。（ウォーレイヌ・フォ

ーリー）果して「内的世界」への逃亡であるかどうかは疑問であるが、それが一種の探求に通ずることは確かである。

六、おまえたちにこそおれの宝は預けられたのだ！

——「魔女」*sorcières*の語は、『イリュミナシオン』の『大洪水』後（「そして、『女王』土の壺に煥かき立てる『魔女』は、自分は知っているがおれたちにはわからないお話を、どうしたって聞かせたくはないだろう。）」や、「断章」（「白い西空に、どんな魔女が身をもたげようとするのだろう。」）にも見られるが、ジャングーはこれをミシュレの著書『魔女』（一八六二年刊）によって説明している。ミシュレはこの書の序論で、『魔女』はいつの時代から始まるのか。わたしはためらうことなく、それは『絶望の時代からだ』と言おう。ローマ教会の世界が生んだ深刻な絶望から生まれたのだ。わたしはためらうことなく、『魔女』はローマ教会の犯した犯罪である」と言おう。」と書いているが、『地獄の季節』の序に描かれているのも同じ人類史の段階であって、「古代の『美』の時代の後に、『魔女』の悲惨がやって来る。」

(op. cit., p. 15) というのである。この説明の仕方はいささか牽強附会であるとしても、他の研究者たちも認めるように、ランボーが「魔女」の語をミシュレの著書を想起しながら用いているということは充分あり得ることである。ドラエーが伝えるところによれば、一八七一年から七二年にかけての冬頃、ランボーは、「ミシュレよりもさらに雄大で、さらにいきいきと、さらに絵画的な」一大散文詩篇の構想について彼に語って聞かせたと「うことであるが (E. Delahaye: Rimbaud, l'artiste et l'être moral, p. 45)」。ランボーがこの頃までにミシュレの著書に親しんでいたであろうことは当然考えられる。『地獄の一季節』においても各所にその影響と思われる思想や表現が指摘できるのであるが、『魔女』に関して言えば、「女見者」*voyante* としての女性、「近代のプロメテウスの諸特徴を備えている」存在としての魔女について語り、反教会・反キリスト教の書物という評判をとって、特に第二版からは検閲の眼を逃れるためにベルギーのブリュッセルから出版されていたこの書が、キリスト教への反抗の情熱に燃え、新しい詩的理念を求めていたランボーに魅力的でなかったはずはない。いずれに

せよ、「魔女」、「悲慘」、「憎しみ」は、美、キリスト教、偽似正義への詩人の反逆的情念が託された語である。フオーリーは、「魔女」を「詩の神秘的形式」としている。

七、踏びかかった。——ランボーの実作のうえで「人間の希望」が次第に影を潜めるようになるのは、「盗まれた心臓」(一八七一年五月)、「看護修道尼」(一八七一年六月)あたりからで、その間にもいわゆるヘコミューヌ詩篇ではなお社会的な変革の希望を歌うという側面を持ち続けていたが、一八七二年四、五月頃の作とされる「恥」に到ると暗さが極まる。

総じて、一八七二年五月前後に集中的に書かれた(後期韻文詩)の時期が、「人間の希望」に逆って進もうとする道の頂点ないし到達点を形作っている。

人間どもの同意とか、

みんな一緒の感激などから、

さあおまえは自由になって

気の向くままに飛んでゆく。

.....
さあもう希望などありはしない、

昇天などもありはしない。

忍耐強い学問よ、

この責苦こそは確実だ。

(「永遠」)

しかし、この道行が、一方で、世間一般の希望や喜びを踏みこじることを通じて、「人生を変え」、独自の「未知」の価値に到達しようという自負に支えられたものであることも忘れてはならない。その意味でそれは「高貴な野心」の時期であり、詩的夢想の「黄金時代」でもあったが、「希望」や「喜び」を閉め出すことによってランボーにますます露わになってきたものは、如何なるものによっても癒しようもない生理的、精神的な「渇き」である。「渇きの喜劇」、「飢餓の祭」、「最も高い塔の歌」等参照。

八、死刑執行人(首斬役人) Bourreaux——ポードレルは『悪の華』でこの語をしばしば用いていて、

俺は 車裂くるまざりきにされる手足で、また裂く車だ。
犠牲いけにえであつて 首斬役人くびきりやくにんだ。

(「我とわが身を罰する者」鈴木信太郎訳)

は特に有名であり、また例えば、

かくて最後に、マリアとしてのあなたの役を完成し、
愛情と野蛮な行為を 混淆こんかうさせるため、
真黒な逸樂よ、怨恨に満ちた首斬役人の
私は、七の大罪で、七の鋭利な懐剣を
作るであらう.....

(「あるマドンナに」同訳)

とも歌っているが、ランボーがこの語を用いているのは全作品を通じてここ一箇所だけであるのは印象的である。しかも、ポードレルがこれを自分自身の二重性を成す一要素として用いているのに対して、ランボーの方はあくまでも外的な復讐の対象として用い、その復讐を通じて、いわば世俗の理解を絶した彼の純一な「無垢」を証

明しようとしているかに見えるのは、両者の詩的態度の差異を示して興味深い。

九、穀竿かむきざなの刑罰——「穀竿」Heaux はもと、豆、麦などの脱穀に用いる農具のことであるが、特に神意による「懲罰の筭」の意にも用いられる。「不幸」を神とする者にとっての試練の一つであり、また、現実憎悪の極度の忿懣の表現であろう。だが、とりわけ、「悪血」ないし「劣等人種」のテーマに通じるものである。

十、罪の風にわれとわが身を干からびさせた——このテーマは「悪血」のなかでさらに明確に展開される。特に「悪血」のなかの、「まだずっと子供の頃……」以下の一節を参照。「おれはまだまだかつてこの民族に属していたことはない。一度だってキリスト教徒であったためしはない。おれは刑罰を受けながら歌っていた人種なのだ。」等々。また、「錯乱」には、「ああ、この頃ときたら、あれは罪をひけらかして歩こうとしているのです。」とある。

十一、しかもおれは狂気にまでさんざん悪戯をしてやったのだ——原文は《Et j'ai joué de bons tours à la folie》で、「気が狂うほど……」とも読めるが、ドラヘーはこれを《mystifier 《la folie》》（「狂気を煙に巻く」）と解し（Les "Illuminations" et "Une saison en enfer" de Rimbaud, p. 180）J・P・ハウストンの英訳でも《And I've played good tricks on madness》（「おれは狂気にさんざん悪戯をしてやった。」）（J. P. Houston: The design of Rimbaud's poetry, p. 141）となっている。恐らくこの解釈が正しいであろう。ここに言われている「狂気」は、まだ、ランボーにとっては不測の結果ではなく、「見者」の詩法の予定に初めから入っていた彼の意識的な方法の一環なのである。すなわち、詩人は「未知のものに到達し、そして、その時狂乱して、おれのさまざまな視象についての知的認識力を失ってしまった時に、はじめて彼はそれらの視象ヴァイジヨンを真に見たのです！」（一八七一年五月十五日、ドメニール宛）ただ、*je joué de bons tours* という言い方には、当初の自負に満ちた予想に反して、「見者」の詩法の挫折を体験した後の幻滅と自嘲がこめられていることは否定出来ない。しか

もランボーは、「おのれのさまざまな視象についての知的認識力」を失うどころか、「狂気」のなかにあってもなお極めて明晰な意識を保っていたようである。「悪戯をしてやった」という言い方にもそれは現れているが、この点に関しては「錯乱二」の次の箇所参照。「狂気の、——人が閉じ込めている狂気の——数々の詭弁は、どれ一つとしておれは忘れなかった。残らずぶちまけることだつて出来る。からくりの糸はしっかり握っている。」なおこの「おれは狂気に……」の一句は、「聞いてくれ。この物語も、数々の俺の狂乱の一つなのだ。」で始められている。「錯乱二」との対応から見ても、明らかにランボーが「見者」の詩法を実践し、しかもそれが「狂気」や「錯乱」にまで近づいた絶頂期、すなわち一八七二年春頃の詩的試みの段階を指すものである。それは彼が、「素朴な幻覚に慣れ」（「錯乱二」）ることからさらに進んで、「出来るだけ道化じみた錯乱した表現」（同）を選び、「永遠」をはじめ、「黄金時代」、「渴の喜劇」、「五月の軍旗」、「最も高い塔の歌」等々を書いた時期である。これに対して、前の「罪の風にわれとわが身を干からびさせた」までの記述は、漠然と見者修業の時期、一八

七一年春から一八七二年春までの状態を指すと考えることもできるが、ベルナルは、一八七二年春よりも前の段階、特に韻文詩「俺の心よ、血と燠の……」が表現している段階に相当するとしている。すなわち、「ランボーはここで、『悪血』に描かれているのと類似の怒りと反抗の一状態を描いている。この段階は、『言葉の錬金術』で述べられているヴォワイヤンスの試みに当るものだろうか。私にはむしろ、それに先立つものに思われる。調子は『俺の心よ、血と燠の……』のそれであり、この韻文詩は明白に、ランボーが『無政府主義的』で『コミューヌ主義者』であった時期のものである。社会への叛逆、罪への呼びかけ、怒りと激情の叫び。もし、「ヴォワイヤンスの試み」というのを、「狂気」や「錯乱」の絶頂期だけに限って考えるなら、これは妥当な意見であると言つてよい。この「序」でランボーは、短い一文のなかに、幼年時代からの彼の過去の諸段階を一挙に要約してみせているのであるから、事実との対応のうえであまり細かく限定することはとも無理であるが、しかし、それが正確に何時頃に相当するにせよ、無政府主義的、コミューヌ主義的な「社会への叛逆、罪への呼びか

け、怒りと激情への叫び」から、ヴォワイヤンスの試みによる「狂気」や「錯乱」の時期へ、という過程がここで辿られていることは確かである。

さてこうして、旧来の「美」や「正義」に叛逆して、一切のいわゆる「人間的」な要素を排除して（詩人を志す人間に、第一番に必要なことは、「怪物じみた魂を誇り上げること」、「自分自身を探索し、自分の内部で、一切の毒を嘗めつくし、その精髓だけをわが物とする」こと、と「見者の手紙」は言っていた）「不幸」や、「罪」や、「狂気」をみずからの法則として生きたランボーにやって来たものは、善悪を超えた至高の叡智や「未知」よりも、幻滅と心身の衰弱、「白痴のむごたらしい笑い」であった。

十二、やがて、春が白痴のむごたらしい笑いをおれに運んできた——この「春」は一八七二年の春であるとすると、点で研究者たちの意見は一致しているようである。「この句は……『言葉の錬金術』に描かれている試み、ランボーが一八七二年の春に知ったはずの錯乱と半狂乱を呼び起している。」（ベルナル）「この春は、一八七

二年の極端な経験を持った春である。」（ユベール・ジュアン）「言葉の錬金術」、特にその反古草稿と読み較べてみれば、この点にはほとんど異論の余地がないことが解る。「言葉の錬金術」の反古草稿では、韻文詩「永遠」の引用箇所が続いて「黄金時代」の引用が予定され、そのあと次のようになっていた。「この時代において、それは書かれない、歌われない、わが永遠の生活であった、——人がそれを信じはするが、自ら歌うことはない摂理のごとき何物か（一なる世界の諸法則）であった。」そして、これに続けて次の一句が置かれている。「この高貴な瞬間の後、完全なる愚鈍が〔来た〕」。韻文詩「黄金時代」をはじめ、これらの言葉はいずれも決定稿には残されていないものであるが、この「完全なる愚鈍（茫然自失 *stupide*)」は、明らかに「白痴のむごたらしい笑い」に相当するものであろう。ランボーは反古草稿のこの句の言うところを「序」に書くことによって、重複を避けるために「言葉の錬金術」の決定稿からは削ったのかも知れない、と仮定することもできる。いずれにせよ、一八七二年五月作の「永遠」、また、同年六月までには書かれていたことが確かな「黄金時代」の引用の直後に

この句が置かれているところから見て、「序」に言う同趣旨の内容に関わる「春」もほぼ同じ頃を指すものと考えられるのである。言い換えれば、「完全なる愚鈍」あるいは「白痴のむごたらしい笑い」がやってきたのは、「永遠」や「黄金時代」の「道化じみた錯乱した表現」、「歎喜の極み」(反古草稿)、「高貴な瞬間」、そしてまた「架空のオペラ」に引き続いてであった、ということである。「言葉の錬金術」では、このあとさらに次のように語られるであろう。「おれの健康は脅された。恐怖がやってきた。幾日も続く睡りに堕ちては、起き上り、世にも悲しい夢から夢を辿った。臨終の時は熟した、そしてこの世の果て、影と旋風との国キンメリアの果てへと、危険な道を、おれの弱さがこの身を導いたのだ。」

なお、ジャンギーは、ランボーにおける「春」は、つねに弛緩、凡庸の象徴として否定的に用いられるとして、一八七〇年五月二十四日附バンヴィル宛の手紙のなかの「これを僕は春のものと名づけているのですが」や、「見者の手紙」の「ミュッセの精神たるや春向きであり！」をはじめ、次のような例を挙げている。

語れ、おどろくべき反抗に

黒々とした春の大草原に非ずして、

(「花について詩人に語りしこと」)

春は爛漫、それというのも

ティエールやピカールなどが飛びめぐり

新緑の地所の真ん中から

開けっ放しの栄光を擱んでいるからだ！

(「巴里の軍歌」)

やがて董色の大樹林に芽は萌えて、ユーカリスがおれに春だと告げた。

(『大洪水』後)

「ユーカリス、フェヌロン作るところのこのニンフ」とジャンギーは皮肉を籠めて書いている (op. cit., p. 95)。

以上でランボーは、驚くべき簡潔さの裡に、幼年時代からヴォワイヤンスの試みとその挫折に到るまでの期間の話を終え、次はいきなり「ついこのあいだのこと」に

移る。実際にはこの間に、ヴェルレーエとの二期にわたるロンドン生活、「言葉の錬金術」で「おれは旅をして、この脳髓に集り寄った様々な呪縛を、祓ってしまわねばならなかった。俺は海を愛した、この身の穢れを洗い落してくれるものは海だったに相違ない。俺は海上に慰安の十字架の昇るのを見た……」と語られ、次第に深刻な様相を呈してゆく詩的、宗教的、またヴェルレーエとの愛欲的な危機の時代が挟まることになる。その間の様子については、「地獄の夜」や「錯乱」に精しく描かれる。

十三、まさに危うく最期の音をあげそうになったおれは、——これが一八七三年七月十日、ブリュッセルでヴェルレーエに拳銃で撃たれた事件を暗示している、とする点でもまた、ほとんどすべての研究者の意見が一致している。「最期の音」は、原語では *le dernier coup de couac* は、主として管楽器を吹く際に、初心者が出す調子外れの音、その擬声詞である。鳥の鳴声などについても用いられるが、さしづめ「最期のギャツの一声」とでもいった感じであろう。

十四、食欲を取り戻すこともあろうかと。——「むかしの饗宴」とは、言うまでもなく、冒頭に語られていた「すべての人の心が開き、あらゆる葡萄酒が流れた饗宴」を指す。「美」を苦々しいと思いはじめて以来、その饗宴は遠く忘れ去られ、失われてしまっていたが、超人的な希望に導かれて二年間の異常な体験を経て来たランボーは、幻滅と憔悴の果て、さらにその上、ブリュッセルでの危うく命を落さんばかりになった事件の衝撃の結果、もう一度昔の、活力に満ちて魂の自由な交流があった生に立ち戻る手立てはないかと探すのである。その鍵さえ見つかれば、あらためて生きる意欲を見出しうるかもしれない。「むかし」*ancien* の語は、ランボーにあつては一貫してベジヨラティブな意味に用いられる、とジャングーは指摘しているが (*Op.cit.*, p. 377—378) ここでは、次行で直ちにこの考えが夢想に過ぎないことが告白されている以上、少なくともこれを書いている時には、ランボーは既に「むかし」に帰ることの不可能を充分に承知し、従ってこれもパロディックな意味合いを籠めて書いているのであろう。しかし、ブリュッセル事

件後の一時期、彼が実際にその可能性を真剣に考慮したことがあることも確かである。七月十日、ヴェルレーヌに撃たれて左手頸に負傷、サン・ジャン病院に入院。七月十九日退院。その後もなお暫らくの間、煙草商バンスマイユ夫人宅の一室で静養。「閃光」の章に「施療病院のおれの寝台のうえで、香の薫りがふたたび非常に強くおれを襲った。」と書かれている体験は恐らくこの間のことであろうし（その前にロンドンで入院の経験があったとの説もあるが、あまり確かではない）、またこの頃、乃至この頃までに、彼がヨハネ伝を熱心に読んだらしいことも、『福音書による散文』の存在や、『地獄の一季節』に同書からの影響が数多く指摘出来る点から疑いのない事実として想定できる。

彼が夢想する「むかしの饗宴」は、繰返して言えば、「すべての人の心が開き、あらゆる葡萄酒が流れ」るようなものであったが、葡萄酒とは、キリスト教徒にとつては言うまでもなくキリストの血を意味し、また異教徒にとつては、例えばバツカスの饗宴を想起させるものであろう。冒頭部分では、ランボーが果たしてどちらの意味で書いているのか必ずしも判然としなかったが、少な

くともここでは、次に「慈愛がその鍵だ。」と言われているところから見ても、明らかにキリスト教への傾きを示すものと解せられる。しかし、さらにその次を読めばこれがランボーの最終的な改宗を意味するものではなく、単に一時の「夢」に過ぎなかったものとして語られていることもまた確かなのである。

エチアンブルは次のように言う。「ブリュッセル事件後、ランボーが、一瞬の間、聖なる卓 *table sainte* に、あの『すべての人の心が開き、あらゆる葡萄酒が流れた』饗宴の場にふたたび坐ろうかと考えたことは確かである。しかし、その席につくためには、代償として『慈愛』に、すなわちキリスト教に戻らねばならない以上、この考えは彼が『夢を見ていた』こと、彼が間違っていたことを証明するものである。」(Etiemble et Y. Gauthier: Rimbaud, p. 53) ベルナルもこれを受けて書く。「この句を、ランボーのキリスト教信仰への復帰と解することは不可能であろう。なぜなら、次の句で打消されているのであるから。ランボーが改宗の可能性を、エチアンブルが言うようにふたたび『聖体拝領台 *sainte table* につく』可能性を垣間見たことは確かである。しかし、

彼は(キリスト教の)慈愛のなかに信仰への復帰の途を見出すことは出来ないと考えたか——それと言うのも、慈愛は、あまりに穏和、あまりに受動的であって、彼には相応しくないだろうから——、さもないければ、決定的に破滅し、いつまでも『ハイエナ』たるべく宣告された『地獄墮ち』と自分を判断したかのいづれかであるが、この後者の解釈が次の節を裏附けるもののように思われる。

なお、イザベル・ランボーやベリション等、ランボー自身の近親者の、多分にカトリック社会の思惑を氣にした強引な解釈以来、ランボーをキリスト教の陣営に引入れて解釈しようとする傾向には根強いものがあり、従ってそれに対する反論も賑やかであるが、対キリスト教の問題というのは、特に『地獄の一季節』解釈においては最も重要な問題の一つである。

十五、慈愛がその鍵だ。——「慈愛」charitéの語は、この他「悪血」、「錯乱」、「不可能」、「訣別」等、全部で七箇所用いられていて、『地獄の一季節』におけるランボーの思想の動きを知るうえに最も重要な語の一つで

ある。『地獄の一季節』の「鍵」言葉の一つであると言つてよからう。それはほとんど「神」と言うのと同義であつて、とりわけキリスト教の神との関係、またランボーの窮極的な救いの可能性にかかわる言葉である。

例えば「ヨハネ伝」がキリスト教の愛について隣人愛、兄弟愛を強調しているのでもわかるように、ランボーが「慈愛」を問題にするについても、ヴェルレーヌとの愛情関係が大きなモチーフになっていることは争い得ない事実である。キリスト教信仰に対してと同様、ヴェルレーヌという生身の人間との関係にどう対処するかがこの頃のランボーの大きな関心事だったと考えられる。これには異論もないわけではなく、また作品解釈に直接結びつける必要もないが、少なくとも潜在的にはそうした二重の問題を集約するような「慈愛」という言葉をめぐって、ランボーの態度は幾度も揺れ動くであろう。だが、ここではとにかくそれをきっぱりと振り捨てる。

スターキーは次のように説明している。「慈愛とは単なる親切でも愛他主義でもない。慈愛の状態までのぼるためには、自分自身の何かを犠牲にすることが不可欠の要件であり、自己滅却、自己放棄に達することが必要で

あった。ランボーは、自ら慈愛を実践したと考えたが、それは、その他のすべてと同じく錯覚に過ぎなかったことを発見したのである。しかし、彼はいまもう一度それを達成することが出来るかも知れない。慈愛は、エデンの園の門をふたたび彼に開いてくれる鍵かも知れない。だが彼は、まだ彼自身の自由を犠牲にする用意が出来ていないとは感じない。あの完全な自己滅却の状態に達する用意が出来ているとは思えない。そこで彼は言うのである、『慈愛がその鍵だ——こんな考えが閃いたのは、おれが夢を見ていた証拠だ』。唯一の有効な鍵を掴むこと

が出来ない以上、どんな報酬もあろうはずがない。」(E. Starke: A. Rimbaud, p. 294)

以下、註解すべき点はなお多いが、紙数がないのでひとまずここまでにしておく。

附記——本稿は、故鈴木信太郎先生監修で発刊されるはずであった『ランボー全集』の註釈として書いておいたものの一部に、多少の手を入れたものである。すでに古いものなので不満もあるが、いまはこのままにしておく。

(一橋大学講師)